

本谷口番所跡

江戸（現在の東京）幕府が石見銀山を 17 世紀初期に直接管理するようになると、銀山の周りには柵が造られ、すべての出口には番所が建てられました。これは石見銀山を出入りする人や物の流れを管理するためでした。こうした番所にいた衛兵たちは、銀山へと入る品物にかけられた税金が支払われるようにしたり、幕府の財源となる銀が密かに持ち出されないようにしたり、柵で囲まれた場所で働いたり暮らしたりすることを許可された人々のみがそこに入るようにしたりするよう確実にする任務を担っていました。中心の採掘地域の周りには 10 の番所がありました。また、政府が直接管理し、150 ほどの近隣の村を抱えていた銀山御料という地域一帯にはさらに多くの番所がありました。本谷口では 18 世紀後期まで石見銀山における主要な採掘場の 1 つであった本谷（「主要な谷」の意）への入り口を監視していました。石見銀山で最も多く鉱石が取れた坑道や縦坑のいくつかが本谷にあり、非常に多くの鉱山労働者やその家族たちがその地域に暮らしていました。このことにより、本谷口とその近くにある水落口という 2 つで対となる番所は石見銀山の取り締まりにおいて主要な地点となりました。番所の建物の跡は一切残っていませんが、道端にある小さな土塁がその場所を示しています。